

男性優位の企業風土が色濃く残っていた一九九〇年代、経営学修士(MBA)に活路を見いだし、会社を飛び出した女性は少なくない。留学費用に貯金をつぎ込んだり、子連れで渡米したり、リスクや苦勞は覚悟の上。企業が女性を海外派遣することがまだ少なかつた時期に果敢にMBA取得に挑んだ女性たちの今を追った。

「今の私があるのはMB スコンサルティング会社に 月、「ユーチューブ」など Aのおかげ。経験の幅と深 就職した後、独立。ニュー と同じ動画共有サイトを新 さが広がった」。そう振り ョークでIT(情報技術) たに立ち上げた。「可能性 返るのは久保田美樹さん ビジネスの最前線を経験し のあるビジネス。米国の 昨(38)。ADSL(非対称 た。約十年を米国で過)し、 経験を生かして収益増を目 去年一月、現職に就いた。 指したい」と意気込む。 帰国した理由の一つは、 女性にとって、MBA留 自分自身で新規事業を立ち 学の道は平たんではない。 男性の場合、企業が費用を 上げた」との思い。今年一

会社飛び出し活路

私費留学で MBA取得



「ようやく思い描いたような仕事ができるようになった」と松田さん

負担して留学する「企業派遣」が多い。だが、女性は企業派遣の門戸が狭く、自分で費用を賄う「私費留学」を選択せざるを得ないケースも目立つ。

MBA・海外大学院留学の教育支援を行う、アゴス・ジャパン(東京・渋谷)の横山匡会長は「私費留学だと休職か退職せざるを得ないし、留学後も職につける保障はない。当初は留学を希望していてもリスクを勘案して断念する女性も多い」という。私費留学の費用は二年間で千万~千五百万円が目安。奨学金などを利用しても負担は重い。

外資系コンサルティング会社、ブーズ・アレン・アンド・ハミルトン(東京・港)に勤める松田千恵子さん(42)も苦勞した口だ。九九年、日本にキャンパスを開いていたフランス国立ポンセシヨセ国際経営大学院に入学、働きながらMBA取得を目指した。

結婚していた松田さんにとって海外留学よりも現実的な選択だったが、予想以上に講義はハードだった。「講義はすべて英語。週末はもちろん、平日も夜九時まで講義で埋まった。米国の講義もあり、夏に二週間ほど現地に飛び必要もあった」。松田さんは現在、エグゼクティブ・ディレクターとして企業経営のコンサルティングを行っている。

「子どもを抱えたシングルマザーがMBAを取るの大変だった」と言うのは、ネットイヤーグループ(東京・渋谷)の石黒不二代社長(49)だ。

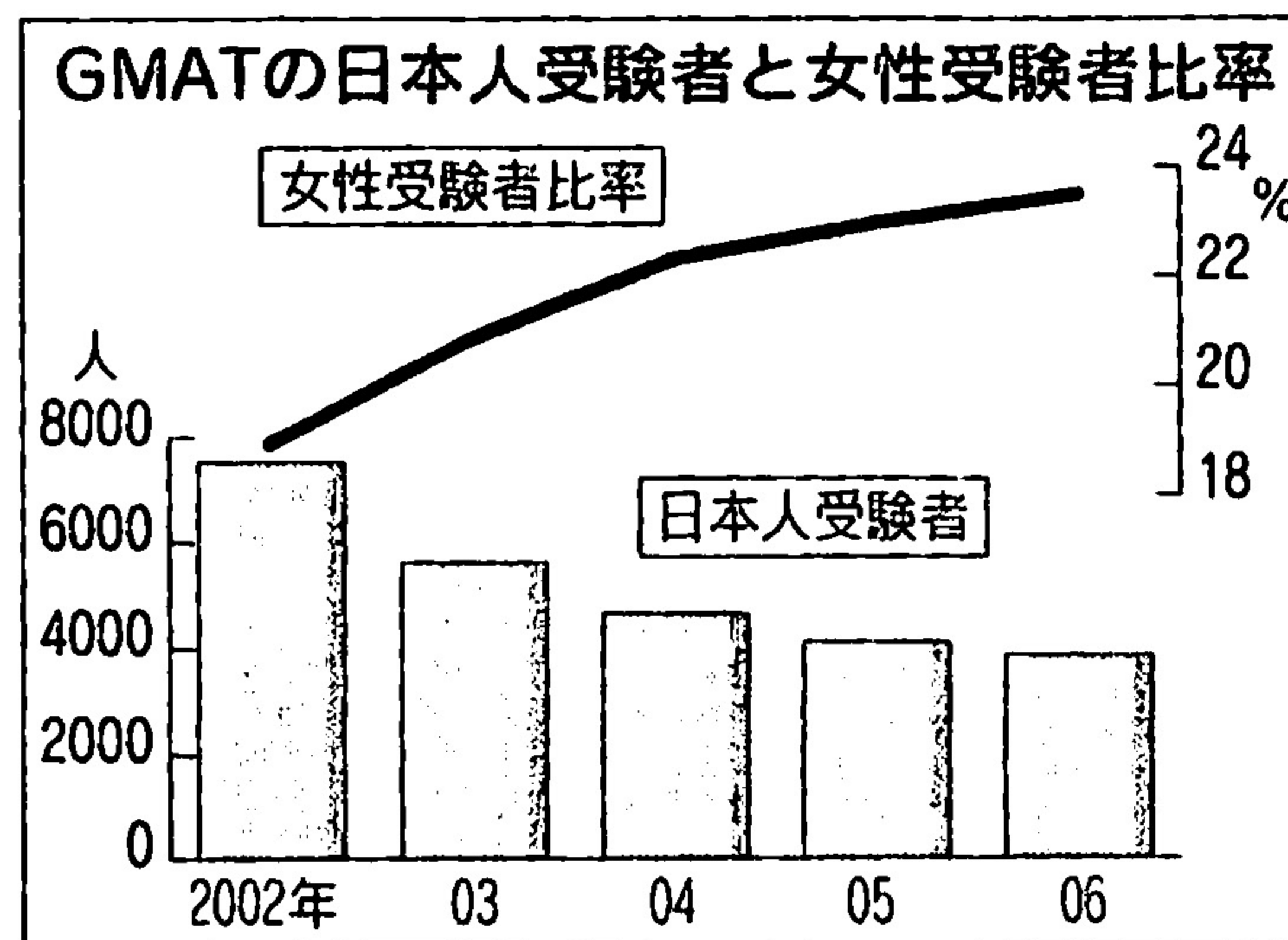
九二年に米スタンフォード大に渡ったが、男女の留学生の境遇の違いは明らか。日本人男性は十人中九人が企業派遣だったのに、女性は五人中四人が私費留学だった。「私費と企業派遣では必死さが違う。MBA留学は職歴をリセットして自分の可能性を考え直す良い機会だった」

女性のキャリア形成について研究する関西学院大学の内藤教授は「MBAを取ったことで周囲の偏見がなくなり、働きやすくなった」という女性の声もある。国内のMBAプログラムも増えており、リスクを抑えながらキャリア構築を図ることも可能だろう」と助言する。

費用・リスク 乗り越え

ただ、代償は小さくなかった。授業料や生活費など費用は約一千万円。複数の奨学金を申請し、足りない分は貯金をつぎ込んだ。両親にも心配されたし、先の約束もないのに大企業を退職するのは勇気が必要だった(久保田さん)。

思い切った「自分への投資」は卒業後に実を結ぶ。現地で日系のネットビジネス



最近五年間のデータを見ると、MBAを目指す日本人は減少傾向にある。

欧米のビジネススクールに出席する際に受ける適性テスト「GMAT」を、二〇〇六年に受験した日本人は約三千八百人。

MBA留学がブームだった二〇〇二年の半数程度に落ち込んでいる。国内の雇用環境が改善し、海外留学以外にもキャリアの道筋が増えたことが背景にあるという。

企業派遣 徐々に広がる

その一方で、GMAT受験者用機会も広がっている。MBAに占める女性の割合は上昇して取得者の転職支援を手がけるア四・六増え、〇六年は二三・内には、財務やファイナンスに五%となった。「以前に比べれ精通した人材が不足している」。

外資系企業やIT(情報技術)企業は もちろん、金融機関

ば女性が企業から派遣されるケや商社など国内大手企業もMBAースも増えてきた」という関係 A取得者の採用に前向きになっ者もあり、女性比率の増加を後 ている。性別を気にする企業は押ししている面もあるようだ。 少なく、女性のチャンスも確実に増えている」と話す。